

# 南和男先生を送る

駒沢史学会会長 渡 辺 惇

南和男先生は、このたびめでたく古希を迎えられ、また、一九九八年三月末日をもって、駒沢大学の定める規定により定年退職されました。先生は八八年四月、駒沢大学に赴任されてから、十年間にわたり、文学部歴史学科および大学院において、日本近代史の教育と研究に恵念され、本学の発展に多大の貢献をされました。

本特集号は、先生の古希とご退職を慶賀して、ご専門の幕末維新史を中心に、先生のご薫陶を受けた方々に論文の執筆を依頼し編集したものである。執筆者一同、これまでの先生のご指導に感謝の意をこめ、また今後ますますご清栄ならんことを祈りながら、献呈いたします。

先生は一九二七年十二月、大阪市天王寺区上本町にお生まれになり、十四才まで大阪で過されたのち、四二年父君の転勤により東京に移られ、国学院大学予科から同大学文学部史学科にすすまれ、五一年に卒業されました。その後、東京都の公立中学校に勤められたあと、東京都立航空工業高等学校に移られ、三十年間にわたって在職され、八八年三月、教授として定年退職されたあと、同年四月駒沢大学に迎えられました。先生の教育職としての歩みは、実に通算四七年の長きにわたります。

先生は幕末維新期の大都市江戸の社会を一貫して研究され、この分野における第一人者である。先生が江戸を研究するきっかけとなったのは、学生時代に、『旧幕府引継書』と称される第一級の根本史料に接したことにある。これは江戸の町奉行所が残した膨大な諸記録で、町民の日常生活全般におよぶ豊富な内容を蔵したものである。幕府崩壊後、これが東京府に引継がれ、さらに国立国会図書館に保管されていたのを、公開にともない、先生がそのなかの五万冊分を内容ごとに分類され、目録を作成された。当時、江戸の人口は、元禄時代に百万を超え、幕末には二百万に達し、ロンドン・パリを凌ぐ世界最大の都市

として活況を呈した。しかも人口の半分は町人が占めた。先生はこの町人社会において生起するさまざまな事象、諸問題について、上記の史料を駆使して、実証的な研究を積み重ねられた。その成果は、『江戸の社会構造』、『幕末江戸社会の研究』としてまとめられ、後者により、八一年立正大学（主査北島正元）から文学博士の学位を授与された。先生の関心はさらに大阪・京都・名古屋などの諸都市にもむけられ、これらは『幕末都市社会の研究』として結実した。

右の三部作が先生のご研究の中核をなすが、このほかに特記したいものに、風刺画に関する研究がある。当時江戸では「絵解き」とよばれる風刺画が流行した。だが研究者の間では、浮世絵ほどには注目されなかった。先生はこの風刺画が社会の風潮を鋭敏に反映していると考え、丹念に材料を収集され、江戸期と幕末維新期の二冊にまとめられた。これは視覚資料を通して社会史を究明されたきわめてユニークな研究といえる。浮世絵についても先生は関心をもたれており、駒沢大学における在外研究では、オランダに出かけられ、当地に収蔵されている浮世絵を調査された。先生のご研究は以上にとどまらない。しかし専門外の私には手に余るゆえ、詳細は著作目録を参照されたい。

先生は学部と大学院の授業をほぼ半分づつ担当された。とくに大学院においては、学位論文の審査などを含めて、重要な役割を果たされた。院生の研究指導、前述の『旧幕府引継書』の史料講読、毎夏の山口・長州における合宿調査、そして吉田常吉先生以来続けている「幕末維新研究会」の運営とご指導など、ご苦労の多かったことと思われる。先生のご退職を記念して出された研究会の機関誌『翔龍』（第二十号）には、多くの院生・卒業生によって、論文とともに、先生に対する思い出が寄せられており、研究熱心で、温厚・誠実な先生のお人柄が吐露されている。

先生が駒沢大学の図書館を大変よく利用されたことは、おそらく多くの方が気付かれていたことと思われる。このことは先生ご自身も語っており間違いない。歴史学科が主催した送別会の席上、「長い教育と研究活動のなかで、駒沢の時代がもっとも充実していた」とのべられた先生の言葉が、私には特に印象に残っている。どうか先生には、ご健康に十分留意されて、今後とも私たち後進をご指導下さいますよう祈念いたします。